

区。文治2年(1186)に重源上人が東大寺再建の用材を求めてこの集落の奥山に入ったことから、三谷には奈良原、木地屋、奥谷などのゆかりの地名や、木材を搬出した跡地、岩堂、多くの人夫が死亡しそれを供養した千人塚など、多数の史跡が残っている。

高度な積石工法を今に伝える 9kmにおよぶ石垣群と茶畑

三谷川に沿って形成される水田は延々9kmにわたり、面積は約40ha。うち斜面に石垣を築いて耕地にした柵田は1000枚に達している。この地方の山や河川に産出する流紋石という自然の石を実にきれいにしつかり組み上げた石垣は、長い年月を経た今も崩壊することはほとんどなく、昔から「三谷の石垣には草が生えない」と言われてきたという。

地域の中央部にある交流会館で待っていてくれたのは、三谷石垣柵田会代表世話人の有井敬三さん(57)と柵田オーナー制度設置や運営等の指導に当たってきた(社)徳地町農業公社の山根洋達さん(59)。

交流会館は、昨年3月で廃校になった三谷小学校の跡地に誕生した施設で、地域の人たちの文化活動やオーナー達との交流活動に使われる。今年の田植えに合わせてオープンしたものでヒノキの香りにあふれている。

「先祖から引き継がれてきた千枚の石垣柵田も、農家の高齢化などで最近では荒れている田が増えてきました。三谷地区が元気になるにつれて、石垣柵田を守っていく方法はないかと思案してきて柵田オーナー制度と出会いました」と有井さんは言う。

昭和47年に169戸、693人だった三谷集落は、現在100戸足らず150人になり、農業の担い手は高齢化している。オーナー制度には柵田を持つ17名の地権者が参加、3年

前からスタートした。オーナーは1畝3万2000円、2畝5万4000円の会費で田植えや稲刈りに参加、採れたお米のすべてと農家の作った野菜などを年2回プレゼントされる他、蕎麦打ち、しめ縄づくり等のイベントに招待される。現在33組のオーナーが登録するまでになった。「初年度はこちらの受け入れ体制を考えて20組にしましたが、希望者が増えたため徐々に増やしています。リーダーも9組おり、福岡からも3組がやってきます。清流と山間部の気候、肥沃な土壌の田で作った柵田米は美味しいと人気です」

有井さんの家は農業のかたわら、父親の時代まで石工をしていたが、新たに石積みをする農家が少なくなり廃業した。今は石垣にもコンクリートが増えているという。

「コンクリートは豪雨や長雨などの時に地中の水をスムーズに排水できないので壊れやすいです。今後でもできる限り伝統の積石工法を維持していきたいと思っています」と山根洋達さんは言う。

山根さんは柵田オーナー制度の提案者で、事務局を手助けしている農業公社の事務局長。柵田オーナー制度導入に際して石垣の調査を行い、その文化的価値を再確認したという。

三谷の石垣は推古17年(609年)聖徳太子が鹿野に清涼寺を建立した時に技術が伝えられ、奈良時代から明治時代までの一千年間築石されてきた。「建築学や民俗学の専門家がよく見えますが、積石状況により時代がわかるようです。幾つかの工法がありますが、いずれも表面積は小さいが法尻を長く取り、小石を敷き詰めた安定性の高い工法で築かれています。山の上の方には耕作しなくなった田が



上/三谷石垣柵田会世話人有井敬三さん(左)と山根洋達さん
中/新設した交流会館 下/背の高い石垣には中程に足場石を組んでいる

城壁のように大きな石をウェーブをつけて組み上げている家屋敷の石垣